

【中国・韓国・日本】

岸岡駿一郎



岸岡駿一郎氏

最近、日本と中国や韓国との関係が騒々しすぎるように感じる。

四月の月上旬に上海や寧波(ニンポー)を訪問中の私は、寧波で5日付けの地方紙の「台(湾)独(立)分子日本拝鬼」「台独分子参拝靖国神社」という太字のトップ見出しで(カッコ内筆者)、中国語が分からなくても台湾人の靖国神社参拝を抗議する内容のようだと感じた。

今回の時を同じくした中国と韓国の日本に対する不快感の表明は、日本の常任理事国入りに対し、「過去を反省しない国はその資格が無い」。言い方に極めてキツイものが感じられた。

続いて8日上海を立つ朝の現地のテレビ(7時半~8時 CCTV 英語放送)を通して、

現地を実感する機会があった。

中国で大きく取り上げられていたのは、四年に一度と言われる日本の教科書の改訂で、南京事件の記述の仕方や韓国との竹島問題や日本軍の侵入は韓国からの要請による部分部分を巡っての議論である。(私は訂正箇所を調べていない)

名前は聞き漏らしました西欧人との座談に現れた中国の(Pan Zhenquiangとかいう)教授は、今回はどこをどう変えているかを細かく指摘している。そして、「このように計画的に事実を少しずつ消し去ろうという国は、隣国の国民を侮辱しているばかりか、加害行為の過去を反省する意図が無い。だから再び同じことを繰り返すであろう」という議論を展開していた。

また小泉首相の靖国神社訪問に反対した小林陽太郎氏の自宅には、深夜に及び右翼による直伝カーでの安眠妨害があったとか、郵便受けに拳銃の玉が入っていたという事例をあげて、日本は隣国に対する思いやりある自国民を圧力で封じる国であるとも指摘する。

その尋常ではない怒りに満

ちた論調には、大きな戸惑いを感じたのは事実である。と同時にこのような意見は、中国のオピニオン・リーダーの主流意見であろうと感じた。

これはあくまで私の推測だが、上記5日の記事での私の理解が正しいとすれば、中国から独立国にしたい台湾人の靖国神社参拝は(あったとすれば)、一つの中国という長年の中国の政策に対する日本の挑戦、対中政策の変化という見方がありえたのではないかと。そこから報復的な政策が出されてきたのかもしれないと感じた。

中国でビジネスをする為に、ここ2~3年で20冊以上も色んな本を読んで理解の努力をしてきた。中で一番心に残る本は友人が送ってくれた内山完造著「中国人の生活風景」という戦前の上海で書籍店を経営された方の本である。日本人が中国の慣習を理解せずに色々誤解している事例や考え方の違いを列挙している。こんな一節がある。

「有るか無いか；中国人の子供達と日本人の子供が桃の木の下で言い争っている。「桃の実が一つあるから、あると言っているんだ」「ところが中国人の子は無いと言っ

た」というのが言い争いの原因である。中国では沢山ないものはあるとは言わないのだよ。日本では一つでもあればあると言っただということ、それぞれに教えてやった>というのである。

ビジネスマンにとっては、一つや二つは無いのと同じという人に、品質を高めて不良率をゼロにさせようとするのは頭の痛い話である。こういう考え方をする人達だから、「海洋に突き出した岩などは岩であって島ではない」と領土問題で主張してくる場合は、あながち意地悪で言っているのでは無いかもしれない。他方、狭い島国に住む日本人は例外的な少数意見や事例に注目しすぎて、大局を見ない欠点があるのかも知れない。極論によって意地になって押し返し、国全体の政策が振り回され、自縛してしまい何もできなくなる傾向があるだろう。(無論その特性が世界一の品質に繋がっているのだろう)

しかし自国の持論を一方的に相手に押し付けるのは、相手にとっては不自由と欲求不満を生む原因ともなる。自由な社会は、何をするかで他人を強制しない社会であり、そ

うでない生き活きと力一杯に生きることが出来ないと思う。それは国と国との間でも同じ事であろう。

日韓中三国は互いに他所に行くことの出来ない隣国同士で、いわばアジアという両親から生まれた兄弟のようなものである。

相手の過去の弱点を自己の有利な個所だけとりあげても、現在の問題の解決にならないのは千年の記憶を石に刻む中東の反面教師に学ぶべきであろう。また過去の相手の(違法)行為は、それがゆえに現在の自分の行為の違法性を免責してくれる訳でも正当化するわけでもない。50年前に殴られたから、今になって殴り返すのは正当かという話だ。最近の日本での不良債権の処理問題も含め、大体過去の話は建設的でない場合が多いのである。

過去は無かったことにするのでなく、キチンと認め明確に清算し、その上で将来だけを見つめ、お互いに相手を必要とする事実を認め、相手の要求をどこまで満足できるかを誠実に追求し、それぞれの欠点に対しては大人になって取り組んでゆくべき時期であろう。

